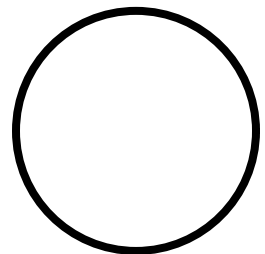


Newsletter

東京大学大学院人文社会系研究科
多分野交流プロジェクト研究ニュースレター
<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/tabunya/>

**Oct. 25
2000**



多分野間の会話 ワーキンググループ座長 岸本 美緒

冬学期に入り、各プロジェクトの活動も再開されています。「人間と価値：歴史意識」（小島毅助教授主査）及び「創造と発信：文化の環境と交流」（沼野充義助教授主査）は、いずれも冬学期からの開講です。ひんやり涼しくなってきた秋の空気のなか、ますます熱のこもった論議を期待いたします。

連携・併任教官として参加して下さっている方々から、多分野交流演習の意義や楽しさについて、ご感想をいただくことがしばしばあります。「うちの大学でもやってみたい」とおっしゃっていただくのは、大変嬉しいことです。思えば、さまざまな分野の研究者が集まって率直に意見を戦わす場というものは、昼飯時や夜の飲み屋などの非公式な形であれ、多くの大学で以前からあったといえるでしょう。しかしそうした時間的な余裕が、私たちの生活からはどんどん失われていることも事実です。学外の先生方からのご好評は、そのような機会を制度的に再建する方法として多分野交流演習が注目されているということを示すものかも知れません。

日本の他の研究機関や諸外国では、専門を異にする研究者・院生間の交流の機会は、どのような形で設けられているのでしょうか。このニューズレターでは、皆様のご経験に基づいた肩のこらない小エッセイを通じ、そのような情報も提供していきたいと考えております。特に、在外研究からお帰りになった先生方などには、突然執筆依頼が舞い込むかも知れませんが、ご協力いただければありがたく存じます。

プロジェクト案内

創造と発信: 文化の 環境と交流

主査 沼野 充義
冬 月曜5・6時限

演習のあらまし

沼野が「主査」をつとめるプロジェクトの3年目である。毎年若干異なったタイトルを掲げて演習を行ってきたが、実質的に趣旨は変わらない。一国一言語の枠にとらわれずに、近代の文学やさらには芸術・文化全般について、専門を越えた者どうしの興味が交差し、対話が成り立つよう「広場」を提供することを目的とする。いわゆる「横文字文学」系だけでなく、日本文学・中国文学から美学、哲学、社会学など、できるだけ様々な分野の専門家の参加を歓迎する。

特に今年度は、それぞれの民族の「境界」を守ろうとする力と越えて行こうとする力の間でどのような緊張関係が生じ、境界そのものがどう変動していくかに焦点を合わせたい。などと言うと難しそうに聞こえるが、要は「一国一文学」のタコツボから出て、交流し合い、自分を豊かにしていくための演習であり、繰り返しになるが、専門とする国・言語を超えて文学・文化研究を共通のディシプリンとして捉え議論する場を形成することが目的である。

今年度は主査の他に、以下の3名の方々を客員教授・助教授としてお招きし、演習に参加していただく。

三浦雅士（『大航海』『ダンスマガジン』編集長／文芸・舞踊批評家）

三宅晶子（千葉大学助教授／ドイツ文学・思想文化史）

中村和恵（成城大学助教授／クレオールなどの広域英語圏文学・詩人・小説家）

これ以外に昨年度まで、学外からの客員としては、巽孝之（慶応義塾大学教授／アメリカ文学）、貝澤哉（早稲田大学助教授／ロシア文学）、園田みどり（東京都立大学助教授／ドイツ文学）、野崎歓（一橋大学助教授〔当時〕

／フランス文学）和田忠彦（東京外国語大学教授／イタリア文学）などの方々に来ていただき、また学内からも、藤井省三（中国文学）、柴田元幸（アメリカ文学）、渡辺裕（音楽学）、安藤宏（日本文学）といった方々に報告・参加していただいた。学内に関しては、これらの先生方には引き続きご協力をお願いするとともに、さらに多くの同僚・先輩の方々に来ていただきたいと思う。より充実した「多分野」的な広場を作ることに、ぜひご協力くださるよう、お願いいたします。

こういった充実した講師陣と大学院生たちの直接のぶつかりあいの中で、学際的な議論が盛り上がる（そして、しばしば議論は場所を替えてそのまま饗宴の席にまで延々と持ち越される）のは、このプロジェクトのすでによき伝統になっている。今年度もその元気をさらに高め、楽しくまた厳しく、気のおけない隣近所とのおしゃべりのようでいて、時に真剣の他流試合にもなるような、そんな演習を続けていきたい。参加資格は、専門・学年を問いません。あまり大きな声では言えないのかも知れないが（？）他の研究科や他大学の方でも、意欲さえあれば、どなたでも大歓迎です。

時間と場所、今後の日程

時間 月曜日 5・6 限（午後 5 時～）

11 月 13 日より、原則毎週

場所 法文 2 号館中 3 階 多分野交流演習室

主査の沼野が 11 月初旬までロシアに長期出張中のため、この演習は 11 月 13 日に開講し、以後、原則として毎週行ないます。ただし 11 月 13 日は外国人講師による特別講義の予定。リトアニアきっての児童文学者による貴重な講義ですので、聞き逃されないよう。冬学期全体の演習の進め方については、11 月 20 日に打ち合わせを行ないます。

11 月 13 日（月）

報告者：リトアニア・ヴィリニウス大学助教授（元文学部長）ケストゥティス・ウルバ博士
「（特別講義）リトアニアの児童文学 ヨーロッパの辺境におけるナショナルなものと越境的なもの」（仮題、講義と討議は英語、通訳なし）

11 月 20 日（月）

報告者：沼野充義

「ロシアと日本のポストモダニズムが切り結び ロシア語訳現代日本文学アンソロジー 編纂の現場から」

論文集『とどまる力と越え行く流れ』について

私たちのプロジェクトでは、2000 年 3 月に、論文集『とどまる力と越え行く流れ 文化の境界と越境』（B5 版、282 ページ）という論文集を刊行しました。これは演習「文化の境界と交通」（1998 年度）および「言語・文化・越境」（1999 年度）の参加者が（教官も大学院生も区別なく）原稿を持ち寄って編んだものであり、全体で 3 年計画の演習にとって一応の「中間報告」の意味あいを持つものです。このささやかな論集は、演習自体がそうであるように、様々な声が響きあうフォーラムの試みであって、単一の何らかの結論を目指すものではありません。しかし、そのすべてが一つの広場に集っていることが大事だと考えます。

論文集の主な内容は以下の通り。

とどまる力と越え行く流れ……………沼野充義
近代日本文学における一人称小説の可能性について……………安藤 宏
アメリカン・ナラティブの三角貿易……………
……………巽 孝之

文学史と「民族／国民」の理念　ロシアの場合.....	貝澤　哉
入れ子の在り処　GMまたはG O L E Mの秘密.....	竹腰祐子
家とアメリカ文学.....	柴田元幸
語りの地理学のためのエスキース...和田忠彦	
日本とロシアの作家の自殺について.....	
..... G・チハルチシビリ	
ニューヨーク・ダダに恋した胡適...藤井省三	
亡命と言語ーロシア亡命文学「第一の波」をめぐって.....	前田和泉
ヨシフ・プロツキーの亡命詩学.....	
.....Kim Hyun Young	
世界の中の日本文学.....	沼野充義
近代国家日本の「国民劇」.....	渡辺　裕
ジャン・ルノワールの亡命.....	野崎　勲
メイエルホリドにおけるファルスの受容.....	
.....楯岡求美	
マイナー演出家、クリストフ・マルターラー.....	菅原美佐
天使の記録ーイリヤ・カバコフ『10の人物』.....	
.....鴻野わか菜	
「バレエとプラトン」のための素描.....	
.....三浦雅士	

本論文集は、人文社会系の教官全員に配布しましたが、まだ若干残部があります。希望者には進呈いたしますので、スラヴ文学研究室(電話内線 23847)沼野までご連絡ください。

プロジェクト案内

歴史と地域：アジアと 日本地域交流－70 年代アジア－幻想 からの離脱

主査 桜井由躬雄

木曜 5・6時限

文・井上あえか（東京大学
客員助教授）

本年はアジアの1970年代に注目し、これを冷戦終結後の90年代を準備する時代として見ながら、各地の特色と相互のかかわりを議論してきている。

4月13日の開講以来、桜井由躬雄「総論」（4月13日）、井上あえか「パキスタン」（5月18日）、橋谷弘「北朝鮮」（6月1日）、小林英夫「日本」（6月8日）、村井寛志「中国」（6月15日）、桜井由躬雄「ベトナム」（6月28日）、村嶋英治「タイ」（9月28日）、片山郷子「インドネシア」（10月12日）と進んできており、今後冬学期に、カンボジア、台湾、フィリピン、インド等に関する報告と議論を予定している。

ベトナムでは70年代半ばから80年代半ばが失われた10年と呼ばれ、アメリカへの「栄光の勝利」が戦後のベトナムを呪縛した。世界最後の社会主義革命の勝利という観念が、中国との対立とソ連への接近、第三次インドシナ戦争、国際的孤立と経済の破綻の道を余儀なく歩ませた。社会主義の力はパキスタンの場合にも影響を及ぼした。60年代の軍事政権が第三次印パ戦争の敗北後崩壊し、選挙によって成立したブットー政権は基幹産業の国有化など社会主義化を掲げた。しかし実際には、エリートの政治支配と地主の経済支配、イスラームと政治の相互依存、牽制関係が完成した時期であった。北朝鮮では、米中国交回復、ソ連東欧の状況が社会主義の資本主義に対する勝利として歓迎され、金日成体制が自らの優位性に自信を深めた。思想・技術・文化の三大革命が推進され、「唯一思想体系」としての主体思想、その解釈者としての金正日の地位が確立された。現実には主体農法や人民経済6ヵ年計画のつまづきによる経済の停滞が悪化していたが、それらの矛盾を国内では主体思想、国外はプラント輸入という形で粉飾した。中国は70年代半ばに文化大革命の終焉を経て、脱イデオロギー化の時代を迎

える。しかしその結果としての改革開放が実現するのは80年代の 小平の時代をまたなければならぬ。タイでは、70年代初頭の世界的な食糧危機やオイルショックの影響を受け、国内は混乱し暴動の多発、遅れてきた社会主義のとこれを警戒する知識人の国外脱出などを経験する中で、アメリカ化と中国化が進んだ。しかしこうした中から第三の道としてタイネス（仏教伝統）が普及し、その傾向は今日に至っている。インドネシアの70年代はスハルトの時代である。独立の父スカルノの後を継ぐにあたってスカルノをすべて否定し、インドネシア独自の政党であるゴルカルの支持を背景に独裁体制を確立した。彼は軍事的・親米的・開発独裁を成功させた大統領であり、経済発展の達成こそが彼の正当性の根拠であった。

70年代には、アジア各地でさまざまなかたちで現実路線を模索する動きが認められる。開放的な体制の場合、「輸出志向・外資導入」の成功による経済成長への展望が得られたかどうか、開発独裁が成功するかどうか、対外従属という批判へ如何に対応できるか、ということが問題となった。一方閉鎖的な体制においては、自立経済が一般に失敗していくがそれは当面表面化しない。むしろ「自主路線」の持つ魅力は依然光彩を放って色あせない。

70年代は換言すれば政治の時代の終わりと経済の時代の始まりを告げる時期であったといえるかもしれない。ただし、客観的には幻想からの離脱の時代であるが、主観的には依然、幻想を断ちがたいものを残し、80年代の展開への準備の時代にとどまったと考えられるかもしれない。今後予定されている各国の報告から、いっそう議論が深まっていくことを期待している。

プロジェクト案内「古代ギリシャ・ローマ研究の方法」

主査 逸身喜一郎 / 金曜 5・6時限

ちょっと「余所行き」 の気分で

文・神崎 繁（東京都立大学人文学部助教授）

近年の大学改革で、「哲・史・文」の区分は、制度的にはあまり意味を持たなくなったように思われるが、それでも研究者相互のあいだでは、やはり「育ちの違い」というか、気風の違いが感じられる場面が少なくない。とりわけ、年に一度の共通の学会（日本西洋古典学会）での研究発表などの折りには、自分の専攻だから僻目にそう映るのかもしれないが、哲学の発表の番が来ると、きまって歴史や文学の研究者がぞろぞろ出ていく場面に出くわしたりする。そんなとき、これもプラトンが「古くからの哲学と詩の争い」を云々して、自らの理想とする都市から詩人を追放したり、また、その埋め合わせではないだろうが、アリストテレスが「詩は普遍的なことを語り、歴史は個別的なことを語る」点で詩の方が哲学的だ、などと妙な持ち上げ方をしたせいで、詩人ばかりか歴史家も敵に回してしまったせいではないかと、しなくともよい穿鑿を逞しくしていると、「なに分からないだけさ」とは退出していく知人の弁。

さて、今回のプロジェクトが、そのような隔たりを払げこそすれ、解消するための機会だなどとは、つゆ思わないが、あるいはこれも、主査（逸身教授）の深慮遠謀のうちなのかもしれない、そのような「育ち」に加えて「個性」の違いをも前提した上で、意外なところで分野を越えた共感があり、また、同じ分野における手法の違いも炙り出されて、滅多にない面白い経験をさせてもらっている。とりわけ、連携教官という「客分」の立場を悪用して、自由に質問できる役得を存分に享受している。その甲斐あってか、自専攻も他専攻も交えた学生諸君の目も意識しながらなされる、教師同士のやり取りはなかなかの見物で、これで自分に発表さえ廻ってこなければ、申し分ないのだが、それではさすがに「連携」の名にもとるというものであろう。

これが掲載される頃には、その当番の発表

からも解放されているだろうが、次第に手の内もわかってきた参加者の顔ぶれを思い浮かべながら、あれこれの反応を予想しつつ、いまそのための資料と原稿を用意しているところである。題して、「三つの事例　　どうして哲学者は詩を誤解できないか」(「理解できないか」の誤植ではありません)。ちょっと調子に乗り過ぎかなという気もするが、最近とみに「はったり」と「背伸び」が欠けているように思える学生諸氏には、ちょうどこのくらいで良いのではなどと自己弁護しつつ、挑発する以上は、裏付けも怠るわけにはいかない。「テキストとそれが受け容れられていた場と文脈」という、既に四回の発表が終わって自ずと収斂してきたテーマに対する自分なりの反応として、自然に思い浮かんだものである。それでも、正直なもので、毎回本郷に出掛けるのを楽しみにしている気分が、題名に自ずと表れているようである。もっとも、その楽しみの幾分かは、演習終了後の文字通りの「シュンボション」も含まれている気がするが・・・。

本プロジェクトの演習の第8回（10月5日）の報告者、小泉義之氏より、当日の報告の要旨をニューズレター用にいただいたので、以下に記載する（松永）。

プロジェクト案内「環境—その自然と人為—」

主査 松永 澄夫 / 木曜 5・6時限

モデルと

シミュレーション

文・小泉 義之（宇都宮大学教育学部教授）

将来、二酸化炭素（温室効果ガス）濃度が増加して、地球温暖化（気候変動）が引き起こされると予測されている。そして現在、国際的にも国内的にも、環境政策が提案され、環境行政が進められている。

しかし、依然として、考えるべき理論的な問題が残されている。

第一に、温暖化している（してきた）にしても、それは人間活動が主原因であるのか、それとも、自然の変動の一齣であるのかという問題である。

これは、地球の長期の気候変動を勘案するなら、必ずしも、自然科学的に決着のついた問題ではないし、そもそも、経験科学によって決着可能か否かが疑われるような問題である。

第二に、温暖化を予測（再現）する数値モデルは正しいのかどうか、そして、その正しさをどのように決めるのかという問題である。

これについては、数理科学者自身によって、数値モデルの難点が指摘されてきたし、その改良案も提示されてきたが、原理的なところでは決着がついていないし、これまた決着が可能か否かが疑われるような問題である。

したがって、地球温暖化を精確に予測することは、理論的にも科学的にも不可能であるだけでなく、有効な近似値を与えることすら不可能である可能性があると言わなければならない。

また、依然として、考えるべき実践的で倫理的問題が残されている。

第一に、温暖化はどうして悪いのか、悪いとして、誰（何）にとって悪いのかという問

題である。

これについては、理論的な予測は不確かであるからには、地球全体の生態系が破壊して人類は絶滅してしまうといった類の脅迫を用いることはできない。もちろん、逆に、地球全体の生態系は大丈夫といった類の慰謝を与えることもできない。問われるべきは、種の生成消滅の機構であるし、種と個体の生成消滅の意味である。

第二に、温暖化を防ぐべきであるとすれば何をなせばよいのか、温暖化予測が不確実であるとき何をなすかをどう決めればよいのかという問題である。

これについては、すでに、さまざまな政治経済的な技法が提案されていて、それを根拠として、いくつかの政策が実行されようとしているが、果たして本当にそれで済むのかということが繰り返し問い直される必要がある。また、局所的に起こりうる個別的な問題について、どのように対処するべきかということが繰り返し問い直される必要がある。

総じて、地球環境問題は、こう收拾されようとしている。すなわち、科学技術のリミットないし限界を越える問題であるにもかかわらず、あるいは、そんな問題であるからこそ、そのリミットないし限界を人為的に操作可能であると見做すことによって、また、危機は不確実だけれども、不確実であっても危機は危機であると煽りつづけることによって、現実の施策をとにかく実行していくこと、そのための制度設計と資源配分と人員配置をとにかく進めること、こんな具合に收拾されようとしている。

このような状況を前にして、哲学は、さらには、理論的な諸学問は、いかなる態度をとればよいだろうか。ここでは、二つの方向を示唆したい。

第一に、地球の気候変動は複雑であるから認識不可能であるし操作不可能であるという

指摘にとどまらないことである。むしろ、モデルとシミュレーションそのものが理論的に前提せざるをえないリアルな次元があるし、さらに言えば、モデルとシミュレーションを使用して生活する科学自身が前提とするリアルな次元があるし、まさにそのリアルな次元のおかげで、理論は有効である振りをできるしテクノクラートは有用である振りをできるということを指摘していくことである。

第二に、実践的かつ理論的には、そのようなリアルな次元だけを守るべきことを訴えることである。

二つとも、本当に難しい課題であるが、それを受けることこそが、学を看板に掲げる者の使命であると思う。

「多分野交流ニュースレター」
第 29 号

平成 12 年 10 月 25 日発行
東京大学大学院人文社会系研究科
多分野交流プロジェクト研究
ワーキンググループ事務局発行
責任者 岸本 美緒
TEL: 03-5841-3898

連絡先 情報メディア室
TEL: 03-5841-3880
FAX: 03-5841-8949

Edited by
Kaori Domae
Noboru Koshizuka

BIT-DESIGN